

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和5年5月8日(月)

みんなの居場所

【雑感】責任が人を育てる

本校は主体性、協働性、創造性を視点として学校づくりを行っています。子供達は3つの視点から「気づき、考え、行動する。」という意識を持って活動をしています。子供達の行動が主体的であるからこそ、その美りも大きいです。

ある本を読んだら、こんなフレーズがありました。「職業はその道に入った人間をそのまじりに造っていく。そのまじりのだ。」なるほど、責任を与えることで人間は変わっていくのです。子供達は、課題を自分のもの(主体性)で仕事意識(と捉え、やりがい(自己有用感)を感じ、結果や成果を自己採り、仲間力を活かして(協働性)抱負意識(頑張っている)です。私達人人もそうですね。与えられた責任、それを果たそうと必死で努力して、何とか結果を出していくのです。私もこれまで、上司の命令に対して、間違っていないかと感じた時は必ず自分の考えを伝えています。しかし、納得がいかない場合もあります。「はい。」の返事から肝を銘じています。そして結果を出していく努力をしています。お蔭様でしょうか、その様な日々の積み重ねが今の自分を作ってくれたのかなと思います。仕事がとれただけ増えるも何かかあるものですね。タイムマネジメントは必ず上手になった方がな気がします。

子供達は私達人間の姿を見て成長していきます。子供たちに押しつけかしくいふ、責任を果たせているか自戒の必要があります。

本校において、低学年の子供達が責任を果たす高学年に憧れ、自分もそのあたりにしたい、という風潮が続いていくことを願っています。

【雑感】人の失敗を笑う人は...

これまでの教職における経験を活かして、「人の失敗を笑う者は自分の善や目標を達成するに近づかない。」と断言しているが、多くの場面でひびいてくる。理由は何だろうか。

ある子供が「生懸命に課題に取り組んでいて思わず失敗してしまっ。通常は「アハハハ、次頑張ろう」とか「大丈夫、君なら出来るよ」と励まし言葉を掛ける子がいる。しかし、たまたま失敗を笑った馬鹿にされたら嫌いな。失敗はいい。なや失敗しないの。それは失敗しない。これは挑戦しないからだ。挑戦しないから失敗しない。だから、人が挑戦して失敗する姿を見てもらいたい。だから、人が挑戦して失敗する姿を見てもらいたい。嫌なことがある逃げたはかりで、立ち止まる壁に挑んでいく。そのチャレンジ精神がないのだ。低学年の間は自分で立てたが、いつかたまたま高学年になると孤立してしまったりが多いように感じる。仲間を作りたいのだが、精神的な成熟がなくて「挑戦する甲斐の大切さ」を生懸命のことが「努力の継続の大切さ」に気がつき始める。失敗を笑う「アハハハ」無むから自分を遠ざけていく。アハハハの現れである。

思春期の入り口にある子供達にとって、精神的に大人になるための「背伸び」をする必要があるが、当然のことながら、心身の未熟さから失敗するものが多いものだ。でもそれを繰り返してから精神的に成長し、人の心にも寄り添ってあげられるようになる。多様な他者と協働して自分の夢や目標を達成していくのである。

回復も言うが、挑戦しない者も失敗しないし成長もできない。挑戦の繰り返しも失敗を繰り返して失敗の中から次の挑戦に活かしていかないとダメ。その繰り返しの言葉を「課題」に、その課題に繰り返すようにして、最終的に目標を達成する。

シリーズ「自分を語る」#008

さて、次はヘルからの研修員受け入れに行きましょう。この研修員の希望は「観光」です。ヘルといえは、マチュピチュ、インカ帝国、ナスカの地上絵、ティティカカ湖...等が浮かびます。観光資源が多い国ですね。しかし、その資源を活かすことができれば国の持ち腐れです。そこで、日本の観光のシステムを学びに来られたという訳です。この研修員の名前は「上村エリカさん」です。名前から想像できますね。日系人です。移民によってお母様がヘルに渡り、現地の方と結婚されたことでした。エリカさんの研修先は「九州産業交通」です。以前、研修員を受け入れて経験があったので、スムーズな研修が可能でした。明るく元気な方だったので、とても研修が楽しかったです。

次は中国からの研修員受け入れです。中国からは「劉(リウ)さん」です。研修希望分野は医療分野でした。外傳による言語障害、聴覚障害等の理学療法です。日本では理学療法(リハビリテーション)については理学療法士が行いますが、中国では医師が行っています。詳しくは分かりませんが、劉さんは医師として働いていました。劉さんの研修受け入れ先は「熊本機能病院」です。前年度に中国からの整形外科医を受け入れていた関係で、劉さんもスムーズな研修をスタートすることができました。ただ、研修そのものは大変だったようです。日本語がよめ分らないの言語障害の理学療法を研修するのですからね。彼女は自転車から渡り、機能病院へ通うことになりました。

海外技術研修員最後の一人は、フジの歯科医「田坂幸志さん」です。名前から想像できる通り、日系二世です。彼はフジの熊本県人会に所属し、日本語で日常会話なら問題なくできました。面接もスムーズに終えることができました。研修先は、熊本県歯科医師会です。敵地は歯科医師会から幾つかの歯科医に派遣されるのです。その代表が「伊東歯科医」です。幸志さんは歯科医というより、口腔外科医と聞いた方が良いでしょう。歯だけではない、顎、顎関節、顎骨にまで専門です。後に研修先訪問で知っていますが、顎関節不整音という噛み合わせが極端に悪い場合、顎の骨を切って調整するものも口腔外科医の仕事です。正に外科並みの手術室が完備されていて、私はもう小学生の見学旅行のノリで視察したいと思っています。

このように、全員を受け入れ準備は済みました。これでもう一度だけ、この面々についてお話し。受け入れが決定すれば、熊本での宿舎を決めなければなりません。この宿舎決定にも曲折が使われますので、条件を満たした上で最も安く、利便性も考え決定しなければなりません。そこで、数社から見積書を取ります。県庁からも各研修先からも近江の宿舎が決まれば、あとは研修員が来日の際の準備は済みます。(つづく)